

校名：お茶の水女子大学附属小学校

所在地：〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

電話番号：03-5978-5875

記載日：平成28年5月20日

記載者：神戸佳子

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

【附属小学校の特色】

大正期の作業教育に端を発する児童中心の教育に取り組み、子どもも教師も学び続けることを大切にしている。生活科、総合的な学習、幼小接続教育、シティズンシップ教育など、本校の教育研究を基盤とした新たな教育が作られてきた。

【附属学校全体】

- ・「オールお茶の水体制」：一つのキャンパス内に大学とすべての附属校（幼小中高）があるという地縁を活かし、日常的な連携体制を基盤として、「教育」「研究」「運営」の各分野において、緊密な連携性を保つ。
- ・幼小中高と一貫して児童生徒の主体性自発性を尊重したアクティブラーニングを推進している。
- ・緊密な連携を可能にする各種ミーティング：学長を長とする附属学校本部会議を中心に、附属学校委員会（運営）、学校教育研究部（教育と研究）、教育研究推進専門委員会（附属と大学の共同研究推進のための会議）をそれぞれ定例でおよそ毎月、高大連携実施委員会を年数回程度開催している。
- ・附属学校教員と大学教員による教育の連携・共同：附属学校教員の大学の授業への協力（教職科目、非教職科目共）、高大連携における大学教員の高等学校教育への協力がある。
- ・公開教育研究会、合同研修会（学内・地域）、外部からの参観視察受入を積極的に行う。
- ・東村山郊外園を大学・附属校が管理運営し、幼小中高の自然教育、勤労教育に活用している。
- ・附属学校の校種を超えた教員と大学教員による、テーマ別部会（研究会）を行ってきた。

貴校の卒業生の活躍状況について：

- ・追跡調査は行っていない。
- ・同窓会組織（茗鏡会）が、卒業年別に幹事をおき、年度毎の卒業生の動向についてある程度の情報を集め同窓会全体で集約している。
- ・各方面の第一線で活躍している卒業生も多く、学校でも講演会の講師や、総合的な学習の講師を依頼することも多い。また、在校生のロールモデルとして、各年代の卒業生から話を聞く機会を設けている。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

○教育

- ・協力学年担任制と教科担任制をとることで、子ども一人ひとりを多面的に見、また、教師も協力しながら様々な課題の解決にあたっている。

○研究

- ・「てつがく」科創設に向けての研究開発（平成 27 年度～30 年度、文部科学省指定）
 - ・食に対して能動的な子どもを育てる SHOKUIKU プログラム（平成 26・27 年度、文部科学省 SSS 指定）
- 大学や外部識者と連携し、日常的に研究協力をおこなっている。

○社会貢献

- ・教育実際指導研究会（公開）において、2000 名を超える日本全国の教育関係者への研究成果の発信（全国 2 位）
- ・生活科のもととなった低学年教育、総合的な学習のもととなった創造活動、幼小連携研究を活かした接続期の創設、シティズンシップ教育の発信等、日本の教育を作るための先導的な教育研究

【低学年教育】

本校では、2012 年度から幼小接続期における教育の改革に取り組んできた。幼稚園年長 9 月から小学校 1 年 12 月まで、ゆったりとした「接続期」を設定することで、子どもが安心して「人・モノ・こと」と関わり、自らの興味を広げ、仲間と共に学びを開いていく生活を大事にしている。

また、このような子どもたちの学びの経験をどのように連続させていくかという新たな課題も含め、低学年教育課程の見直しを行っている。

本校では、①個々の興味がつながり深まる「サークル対話」②自分で選び、活動し、振り返る、「計画表」に基づく学習③保護者の学習参加を、低学年で大切にしたい活動として位置づけ、実践研究を重ねてきた。ここでは、①の事例を紹介する。

サークル対話では、子ども自身の生活や経験、物を教室に持ち込んで話をする。例えば、春は道端の花やミミズ、時には自分が作った工作や絵などから話が始まることもある。子どもの話は断片的だが、質問と応答を通して話して話し手の伝えたいことやその中の言葉のイメージが共有されていく。

A 男：前、千葉県に行って、子鹿が出ました。

M 子：子鹿はかわいかったですか。

A 男：よくは見えなかったの。車だったから。

L 美：あの…小鹿はお母さんと一緒でしたか。

A 男：お母さんとお父さんと一緒でした。ちょうど旅行中だったから

T：小鹿がお母さんと一緒だったのかを聞いたんだと思うよ。

A 男：（教師の発言を聞いて）ちがう。

K 太：小鹿って何ですか。

A 男：小さい鹿。子どもの鹿っていうこと。

A 男：もう一つだけ言いたいことがある。

T：なに？

A 男：野生の鹿。野生の小鹿。

T：野生って何？

A 男：野生ってね、あのね、動物園では飼われているけど、飼われていないってこと。

C 子：え？

Y 介：動物園で飼われている動物いるじゃん。じゃなくて、森で自分で食べ物を見つけて住んでいるってこと。（後略）

A 男は、「小鹿って」の質問にはわかりやすく答えたが、「野生って」の質問に対する答えには「え？」という声も挙がってしまう。そこで Y 介がつけたしし、そこでみんなが納得する。

このように、サークル対話には、自分の知らないことを質問できる雰囲気と、補い合う関係がある。他者の声を聴き、自分の経験や背景を共有しながら対話を重ねることは、その後の学校生活の基盤となる経験となる。

【スーパー食育スクール事業】

本校のテーマにある「食に対して能動的な子ども」の姿として、以下の四つを挙げ、これに基づく実践研究を行った。

- 画一的に与えられた量を食べるのではなく、味や栄養、食べられる量について考えて食べる
- 食べ慣れていないもの、嫌いなものでも少しずつ食べようという意識をもつ
- 人によって味の好みや文化の違いがあることを尊重する
- 食に対して興味をもち、日常から情報を取り込む意識をもつ。何より食を楽しむ気持ちをもつ

本校 SHOKUIKU プログラムは、教育課程全体を通じた様々な方面からのアプローチと、多くの体験的活動を特徴としている。この食に関わる活動は、①食に対しての意識を高める活動、②体験を通して食について考える活動、③食に関する知識を広げる活動の三つに整理できる。

ここでは、①②③すべてに関わる「給食委員会による献立作成」の事例を紹介する。

5、6年生が活動する給食委員会では、取り組みの一つとして、給食の献立を考えている。取り組みのなかでは、まず献立のテーマを考えること、そしてテーマに合ったこだわりをもって料理の組み合わせを考えることを伝えている。子どもたちは、「給食に出たことのない料理を出したい」「お茶に合う献立にしたい」「2つの国の料理が味わえる献立にしたい」などとグループで相談し、テーマを決める。次に、料理の組み合わせと、それぞれの料理に使う食材も子どもたち自身で考える。ここでは、旬の食材を取り入れようとしたり、東南アジアの味を再現したいとナンプラーを使った料理を提案したりする姿があった。

子どもたちが考えた献立は、パソコンを使って栄養をグラフで示し、栄養バランスを確認している。図1の世界の料理をテーマに考えた献立では、脂質が多いことがわかった。栄養教諭からの「料理に使う肉や乳製品を見直してはどうか」というヒントをもとに、クロックムッシュのチーズをぬく、スープの具を替えるなどを試したが、なかなか栄養バランスが調わない。他のグループからは「小籠包をやめたら」という声もあったが、給食に出たことのない小籠包を出したいという気持ちは変わらなかった。自分たちの出したものと栄養バランスの間で葛藤しながら、食材や料理を見直し、図2の献立が完成した。

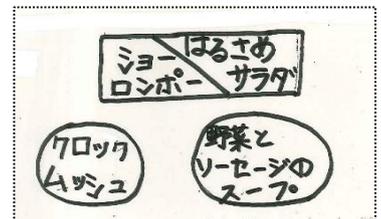


図1：当初考えていた献立



図2：給食に出した献立
あわご飯、小籠包、春雨サラダ、わかめと卵のスープ、みかん、牛乳

(給食委員のふりかえりから) ●おいしさだけではなく、バランス、栄養のバランスを考える。そして見た目や季節感。この献立のバランスはものすごく大変。●小籠包と春雨サラダの評判がよかったです。●みんなに、給食に興味をもって、大切にして、大変さをしてもらいたいです。

【「てつがく」科】

本校では、平成27年度より4年間、以下の研究開発課題で文部科学省研究開発学校の指定を受けることになり、新教科「てつがく」科を創設して、実践に取り組んでいる。

【研究開発課題】「道徳の時間」と他教科の関連を図り、教育課程全体で、人間性・道徳性と思考力とを関連づけて育む研究開発を行う。そのために、自明と思われる価値やことがらを、「対話」や「記述」などの多様な言語活動を通して問い直し考える新教科「てつがく」科を創設する。

以下に、「てつがく」科の授業の様子として3年生における取り組みを紹介する。

子どもたちは、1年生の時から朝のサークル対話の時間を継続して行っている。サークル対話の時間とは、体と体を寄せ合いながら円になって座り、日々の出来事などを自由に語りあう時間である。互いの考え

や思いに寄り添いながら、聴き、質問し、語るという時間の積み重ねによって、聴く身体、聴きあう空間が徐々に作られていく。このようなサークル対話の時間で培ってきた聴きあうことをもとにしながら、子どもから出される疑問や日常の出来事をきっかけとして、てつがくすることを始めることとした。

3年生が自分達で決めた創造活動のテーマは、『大人の力をかりないで、チャレンジしながらやってみよう。』である。その活動の一環として、6月に昭和記念公園でのグループ活動を実施した。活動後、ふり返りを行い、「大人の力をかりないのは何のため？」というテーマでサークル対話を行った。その中で、ある子が「成長するために、大人の力をかりずにやったほうがいい。」と発言し、それに皆が同意する。でも、成長するとはそもそもどういうことだろうか。教師が子どもたちに問いかける。次時では、「成長するってどういうこと？」というテーマでサークル対話を行った。

A児：成長するって、だんだん、ちっちゃい時にできなかったことも、大人に近づいて来たら、できるようになる。

C：あっ、同じこと。

B児：何かA君と似ているんだけど、自分ができないことをやり遂げたら、成長する。

T：やり遂げた時に成長した。成長する。

C児：A君に付け足しなんだけど、1回1回積み重ねる。

D児：思いやりを持てる。例えばだけど、何かバスの中で、老人の人に席を譲れる。

E児：付け足し。思いやりを持てるとか、心が優しくなるとか、そういうことが成長する。

F児：体験をして、それでバージョンアップしていく。

G児：質問。バージョンアップって言ったけど、あの一

自分で、それが、バージョンアップができないこともある。自分で、バージョンアップってレベルとかだと思うんだけど、レベルとかが上がらない可能性がある。

H児：バージョンアップって例えばどういうこと？

F児：自分で自分を変えていく。

I児：Gさんへの質問なんだけど、例えば、できなくても、努力すればできるんじゃないかなって思う

G児：だから努力しても、また、あの一、レベルを自分でどんどん上げてきたけど、上げてきたけど、レベルを上げてきて、どんどん、例えばレベル49とかになると思うんだけど。レベルがアップした時に、どんどん難しくなっていると思うんだけど、そしたらやっぱり自分ができないこともある。

本校では、思考力と人間性・道徳性とを関連づけて全人格的な教育を進めるために、道徳的な議論や生活の中で、自分にとって当たり前と思い込んでいることがらや、既に自明とされている価値などについて、改めて問い直す哲学教育の発想を生かすことで、「21世紀型能力」の養成に努めている。現在、「てつがく」科の内容の開発、子どもたちの対話や思考の深まる姿をみとる評価方法などについての研究を行っている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

本校は公開研究会、参観・研修の受け入れ、研究物の刊行等を通して、全国に向け情報を発信している。全国に対する情報センター、研修の場として開かれた学校とする。また、大学と協力しながら、地域の教育関係者、研究者、保護者、児童生徒が利用できる研究センターの設置を目指している。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本校は、新たな教育課程や教科等の開発に取り組んできている。その成果は、生活科や総合的な学習の創設や、幼小接続期の研究やシティズンシップ教育等、日本の教育のあり方に大きな影響を与えている。現在も、新教科「てつがく」科の創設にむけて、研究開発を行っている。

これらの教育課程、教科等の開発研究には、その基盤となる研究の積み重ね、研究成果の評価を行うための追跡調査等に年月をかけて継続していく必要がある。本校は、その継続を可能にする学校体制ができている。また、大学と附属校園が同一キャンパスにあることは、研究者と日常的に交流し研鑽を深めることを可能にしている。

ダイナミックかつ柔軟な教育研究を行い、日本の教育をリードしていくことが本校の使命であると考える。